

令和6年度 第1回 西宮市貝類館運営委員会  
(議事録)

日 時： 令和6年 11月 19日 (火) 午後 2時 00分 ～ 午後 4時 20分

場 所： 西宮浜公民館 第3集会室

出席委員： 近藤委員長、吉田副委員長、奥山委員、増田委員

欠席委員： 中井委員

事務局： 文化スポーツ課 (石井担当課長、鳴坂係長、青木主査、山西顧問、高田学芸員、渡部学芸員、長本会計年度任用職員)、ワークショップ等受託事業者 (特定非営利活動法人大阪自然史センター 西澤氏)

傍聴者： なし

---

<議事内容>

1. 開会

文化スポーツ課担当課長挨拶。

2. 会長、副会長の選任

委員長に近藤委員、副委員長に吉田委員が選出された。

3. 報告事項

(1) 実施報告

① 令和5年度実施報告

(事務局)

- ・資料に基づき、令和5年度の実施事業、特別展アンケートについて報告

(委員)

・特別展アンケートについて、「どのような目的でられましたか」の設問に対して、「その他」と回答している割合が年度によって大きく異なっている。「その他」とはどのような内容か。

(事務局回答)

・普段は建築を見に来る方などがおられるが、令和4年度、令和5年度は企業が企画する立ち寄りイベントの関係で来られる方が多かったため、その他の割合が増えた。

(委員)

・企業の立ち寄りイベントで目的外利用により入館者は増えているが、リピーターが少ないことを見ると、イベントごとがないと先行きが怪しいと思う。

(事務局回答)

・企業の立ち寄りイベント以外にも他事業者との連携はするが、今回は非常に効果が大きかった。その分、多くの方に貝類館自体を知っていただくきっかけにはなった。

・今までは特別展でのみアンケートをとっていたが、令和5年12月より通常の来館者にもスマートフォンからアンケートを取れるようにしたところ、リピーターの方がおられるように感じる。次回は年単位のものでお示しできると思う。

(委員)

・特別展のアンケートは、特別展目当ての方もおられるため、リピーター率・市内率は低くなる。市内率よりも、市外から多く来ていただけていると言えるのは良いこと。貝類館はレアな施設なので、興味のある人は遠くからでも来てもらえるメリットもある。昆虫館(伊丹市)の特別展の市内率は2割以下だが、市外から来てもらえるように頑張っていると伝えている。あとは、市外から来ている人がリピーターになってくれればより良い。

・西宮にはいろいろなコラボができる資源がある。いいものを展示していたら来てもらえるので、手段を選ばず活用したらよい。貝類館は立地的にはあまりよくないが、逆にわざわざ来た、達成したということが、来てみてすごくよかったと印象をつけられ、SNS時代にはプラスにできると思う。

## ②令和6年度事業報告及び予定

(事務局)

・資料に基づき、令和6年度実施事業、特別展、入館者数、学芸員活動実績について報告

(委員)

・入館者数は指標になりがらだが、質も重要。ワークショップで笑顔があふれていたが、子どもに楽しんでもらえたら、リピーターにもつながる。また、子どもにとっては楽しい場所、親にとっては、ためになる場所となれば、博物館全体の活性化につながる。そのためには、ワークショップは非常に重要と思う。

(事務局回答)

・貝類館のインスタグラムで発信できるように、ワークショップの参加者に許可をとって、実施している姿を素材(写真)として提供している。

・1回何名という枠にすると必ず申込者数があふれるため、申し込み無しのワークショップにして参加の機会を確保したい。また、貝類館に来られない層への取り組みを毎年反応を見ながら実施していきたい。

(委員)

・ワークショップには、質にこだわったもの、入り口として来てもらうために量にこだわったもの、質と量のバランスを取ったものがある。その3つを考えてやっていただいているので今後もすすめていただきたい。

・貝だけではなく、地域の身近な自然の情報センターとしての側面もある。特別展のテーマも地域を題材としているもので、貝類館にしかできない内容なので良い取組だと思う。地域の宝があることを誰かが発信しないと広がらないため続けていくことが重要。また、年々、データを蓄積することも大切。今あるものがいつまでも当たり前ではない。

(委員)

・データだけだと訴える力として弱い。わかりやすい資料があると、一年間なにをしていたかよくわかる。ワークショップでは、成功したもの・効果があったものを活かして、また、新鮮なものを付け加えるように工夫しながらやっていただければと思う。

・ワークショップが入館者数にどう影響するかは難しい。どちらかという、来た人へのサービスにより、子どもの記憶にのこることで、親世代となったときにも遊びにくるという効果もある。知的好奇心呼び起こすサービスはワークショップの役割だと思う。

・入館者数は貝類館単体で増やすのではなく、周辺施設との協働（関係）も大きいと思う。地域全体で盛り上げていくために努力していくことが必要と思う。

(委員)

・特別展のテーマによっても年齢構成が異なるかもしれない。アンケートでテーマと年齢の関係が見れると良いと思う。地元の話だと近所の高齢者が多くなるなど、詳しく傾向がわかる。単純な数ではなく、年齢別など具体的な例があると訴える力にもなり良いと思う。

(事務局回答)

・アンケート項目としてはあるため、来年度の報告では説明できると思う。

(委員)

・博物館に来るのは専門家ではなく一般の方。一般の方に貝の世界や自然の世界を知っていただく。学芸員の研究者としての視点と、一般の視点は異なるため、専門外の事務職からもどんどん意見を言ってもらった方が一般の方に響くような展示になるし、来ていただけることになる。

(委員)

・貝類館という名前が貝のイメージが強い。姫路市立水族館でもできるだけ魚だけにしないように、鳥や虫や植物等も扱うようにしている。そうした他のこと（貝以外）もできることを広めていければ、来てくれる人もいるかもしれない。

#### 4. 審議事項

(1)「基本的運営方針（ミッション）」の策定について

(事務局)

- ・資料に基づき説明

(委員)

・入館者数を減らすことはないようにしないと、公的施設として存続の必要があるのか問われることになる。日本の博物館は昔からマニアックな方向で動いてしまうが、アミューズメントの観点を打ち出しながら、教育的、研究的なことも併せてやっていくことが必要。また、ターゲットを女性、子どもに設定しないと付随してそのほかの方も外れてしまうので、女性、子どもをひきつけることが重要。

(事務局回答)

・公的機関だからこそできる事業もあるので、そこはアピールしていきたい。とくに障害のある方への取り組みをしていただいていることは力になっている。

(委員)

・ベースラインとして多方面の方にアプローチすることは良いとおもう。姫路では、職員の手作りの販売物（ぬりえやガチャポン）が大きな収入になった。貝のストラップを作ったり、カップに貝を詰めるなど、販売もできるのであればそうした工夫も必要。

(委員)

・グッズは収入の面でも、持ち帰ってもらって身近なところにおいてもらえて、リピータ対策にもなる。残念な貝、とか人気ができるのではないかな。

(委員)

・同じ企画でも危険な生き物など人気のものは数年に一回繰り返して実施している。繰り返して実施しても、来館する子どもは変わっていくので、人気がある。

(委員)

・繰り返すことで、ノウハウが集まり、より深まることにつながるかもしれない。  
・基本的運営方針を定めることは必要。登録博物館になると教育機関としての認められたということにもなる。

(委員)

・設置目的としては条例に記載があるため、ずれないようにする必要はある。

(委員)

- ・いきなり方針だけを掲示しても意図が分からないため、前文などがあるとよい。

(委員)

- ・入館者数やら対象者を増やしていく、というのが最終的な目的。そのために、地元新聞にコラムをシリーズで載せてもらうという方法もある。

(委員)

- ・業界で認められていても、市立である以上市民に対して必要性をアピールしないと存続の話になる。もちろん来ていただくことは大切だが、来ない方からも、「あってよかった」とか「子どもや孫が行って楽しんできた」など関心をもってもらうことが大切。新聞・ニュースに登場していたら、市のイメージにも貢献ができ、文化的な高さをアピールできる。自然や貝と関係なくても、貝類館の名前を知ってもらって、あってよかったと思ってもらえるようにアピールしていくことは必要。そのためにも基本的運営方針で示すのはよい。

(委員)

- ・イベントの時には、報道関係に広報しているのか

(事務局回答)

- ・これまで記者クラブへの投げ込みはしていなかった。イベント系はしていくことも検討する。

(委員)

- ・阪神支局など新聞（マスコミ）も余裕がなくなっている 昔はプレスリリースを投げ込んだら反応があったが今は反応がないこともある 別の手は考える必要がある

(委員)

- ・参加者から許可を取って SNS で配信するとか、こちらからの配信は大切。自分の子供や親戚が載ったとなると興味を持ってもらえる。

(委員)

- ・指標だと入館者数だけになってしまうが、誇りというのは、この館が西宮にあることを誇りに思える、この施設の発信力が将来重要なことになるというような期待が持てるということだと思う。貝のことはここにすればわかるということは、西宮市にあるということだけで誇りになるというポテンシャルを持っている。
- ・貝は地球環境のバロメーターであり、貝をアピールすることはそういうきっかけにもなる。いろんな地域の方が共通の目標として環境を守っていこうということがあると思うが、そこに貝という生物はとても重要であり自分たちを守ることにつながる、というシナリオ

があってもよい。そうしたことも含めて、博物館の存在価値を高めていくことが必要

- ・博物館の学芸員は減っていると思うが、西宮市には貝や海の生物の専門の学芸員がいることを誇りに思ってもらいたい。

(委員)

- ・基本的運営方針とは、博物館がどんなものか一般大衆にアピールするのが目的なのか。館のミッションとして掲げるものなのか。

(事務局回答)

- ・市民の方に貝類館が何をしようとしているかを分かりやすく示すことを目的に掲げた。

(委員)

- ・作ることに反対の意見はないが、これをどう扱うかを具体的に考える必要がある。ホームページに掲載して発信するのか、またはこれに基づいたプログラムを出すのか。文書だけでは一般の人には何のアピールにもならないので、文書だけではなく絵で示せると一般の方はわかりやすくなると思う

(委員)

- ・長すぎても伝わらないから、凝縮しているのはよい。
- ・不登校の子とか学校には来れないが博物館には来れる人もいるかもしれない。いろんなすべての皆さんにというのは良いキーワードになると思う。

(委員)

- ・文章の中身に関しては、さまざまなという言葉はやめてもらいたい。
- ・展示が変わらないのは厳しいので、定期的に変えた方がよいと思う。手作りで工夫したり、お金をかけずにできることを考えることも必要。

(委員)

- ・運営方針については、前文などを修正しメールで委員に確認いただくこととする。
- ・ワークショップもリニューアルしたので、アピールの仕方は考えてほしい。アピールの方法としては、特に SNS を使うことが効果的。若い世代以外にも 40 代 50 代も見ているので、発信方法等、今後の発展の方法を考えていただきたい。

(午後 4 時 20 分閉会)